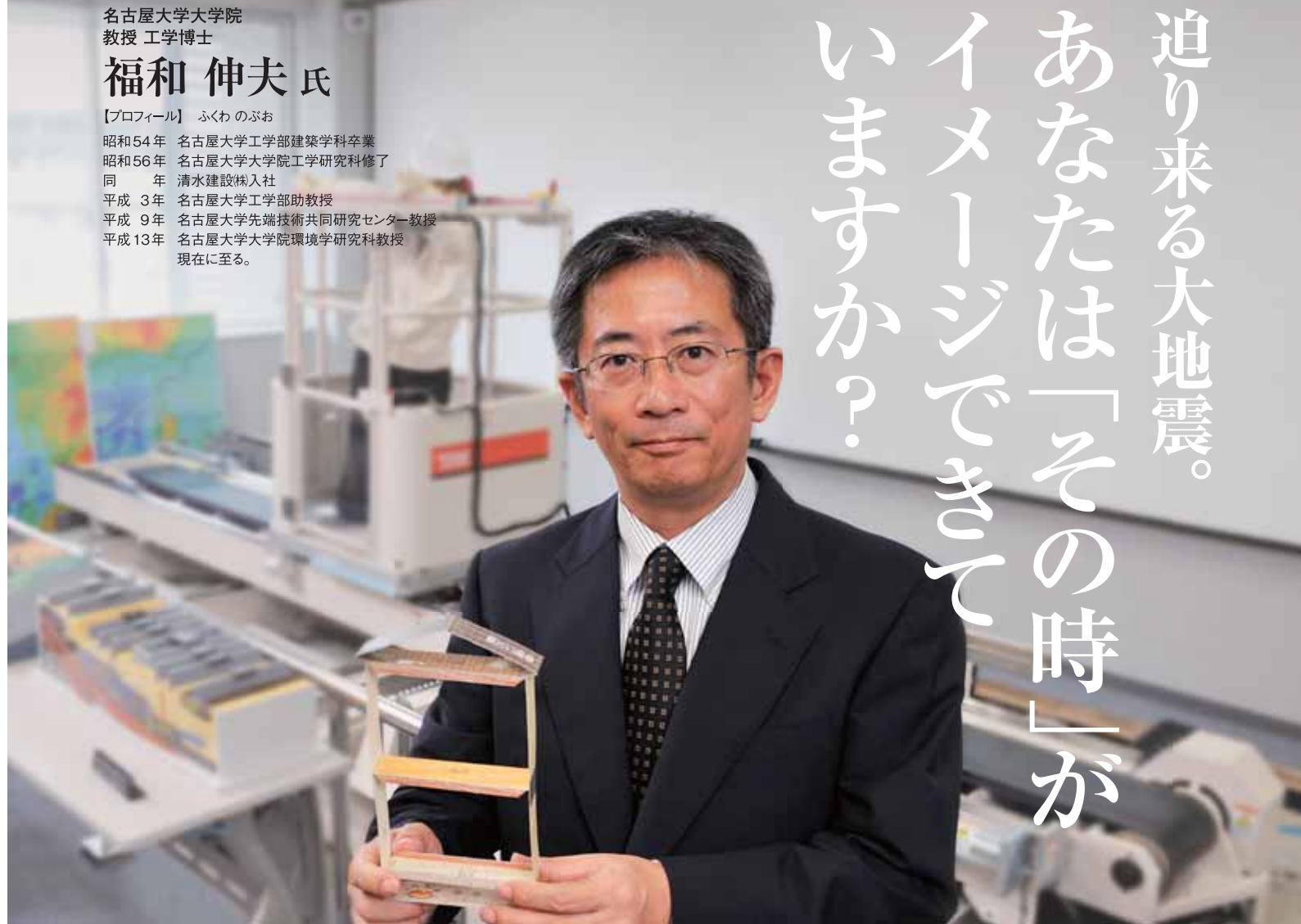


迫り来る大地震。

あなたは「その時」が
イメージできている
いますか？



名古屋大学大学院
教授 工学博士
福和 伸夫 氏

【プロフィール】 ふくわ のぶお
昭和54年 名古屋大学工学部建築学科卒業
昭和56年 名古屋大学大学院工学研究科修士
同 年 清水建設株式会社
平成 3年 名古屋大学工学部助教授
平成 9年 名古屋大学先端技術共同研究センター教授
平成 13年 名古屋大学大学院環境学研究所教授
現在に至る。

まっています。

帰宅困難者問題もなく、地下鉄やエレベーターへの閉じ込めの危険もありません。電化製品は電灯のみ。自然の怖さを知り、地域での互助組織もしっかりしていました。

しかし現在、名古屋市の人口は200万人以上にまで膨れ上がり、増えた人口の多くは都心部に集中、建物を密集化・高層化させました。

かつては、災害が起こっても近隣の人同士で十分助け合うことができたが、建物規模が大きくなった今では、消防でないと救助することができません。また、建物が密集しているため、一軒燃えれば周囲に燃え広がります。

震度6の地震が発生すれば、高層ビルでは震度7の揺れとなって部屋中をかき回します。地下鉄、エレベーター、電気・ガス・上下水・インターネットなど、現代社会が頼り切っている数々の「当たり前」は崩壊し、効率化・高機能化した我々の社会は破たんする恐れがあります。

地震対策は、このような現代社会の脆さを正しく認識し、「その時」に何が起るのかを、しっかりとイメージすることが大切なのです。

●「社長が死なないこと」が大前提

業における地震対策で、経営者がまず取り組むべきは、「自宅の安

全確保」だと言います。

緊急時に、リーダーとなって従業員を先導すべき経営者には、大地震を「生き残る義務」があります。自宅の寝室の家具すら固定できていない経営者に、企業の地震対策を語る資格はありません。

もちろん、自分だけでなく、自分の家族や会社の従業員の安全確保も不可欠です。家族のことで頭が一杯の状態では、会社のことを考えられるはずはありませんし、社員が無事でなければ、誰一人として会社には出て来てくれません。

一人ひとりが、「強い地盤の上に家を建てる」、「そうでないなら家を耐震的に強くする」、「部屋の中は安全にしておく」という基本的な意識を持って初めて、地震対策のスタートラインに立つことができると言えるのではないのでしょうか。

●勝ち残るための「BCP」

また、会社が地震を生き残るために「最低限必要な機能を必ず守る」という視点が重要です。

大地震から、会社の全ての機能を守りきることは容易ではありませんが、最低限必要な操業レベルさえ維持できれば、事業を継続させることは可能です。また、早期に回復すれば得意先から見捨てられません。

●「必ず」起こる大地震

内外で大災害が続発しています。5月2日のミャンマーでのサイクロン被害、5月12日の中国・四川大地震、6月14日の岩手・宮城内陸地震、7月24日の岩手県沿岸北部地震と、3ヶ月の間に様々な災害が発生し、多くの被害をもたらしました。

自然災害の脅威をまざまざと見せつけたこれらの大災害は、我々にとっても決して「対岸の火事」ではありません。当地域は、これらを大きく上回る規模の大災害に「必ず」遭遇します。

阪神淡路大震災の約10倍という、国の危機ともいえる甚大な被害が予想されている東海・東南海・南海地震は、今から30年以内で50〜87%、今後50年以内では80%〜90%起こると言われています。

大地震は、すでに我々の目前にまで迫って来ているのです。

●「当たり前」が崩壊する

現代社会が災害に極めて脆弱であることを実感している人は、ほんのわずかです。

昔のまちはコンパクトで、災害危険度の低い洪積台地に立地し、密集度も高くはありませんでした。

名古屋も市政開始時の人口は16万人で、まちは熱田台地の上だけにとど

大地震が起こってもそのレベルを維持するためには、一体何が必要なのか、そして早く復旧するためには、今何ができるのかを事前に整理し、準備、計画することが必要です。一般的に、この計画のことを、BCP(事業継続計画: Business Continuity Plan)と呼びます。

大半の企業が被災している中では、復旧の早い者勝ちで仕事が取られていきます。地震後に会社が勝ち組になるか、負け組になるかは、現在の備え次第ということが言えるのです。

当地域の企業にとって、今考え得る最大のリスクである大地震。生き残るためには、今すぐ行動を起こさなくてはなりません。

まずは、「その時」をイメージすることから一歩を踏み出してください。

● key Point ●

クローズアップ

携帯ストラップにも地震対策！
福和先生の「3点セット」

笛の中に、緊急時の連絡先やパーソナルデータを書いた紙が入っている「IDホイッスル」と、業務に最低限必要なデータをバックアップしてある「USBメモリ」、そして地震の神様として信仰を集める大村神社の「なまずのお守り」を常に携帯ストラップとして身につけている福和先生。「どれだけ対策を講じていても、どこで起こるかは誰にも分かりませんから(笑)」

